



# 盛岡市

## ユニバーサルな心で進める 杜のまちづくり



北上川と盛岡市街

### 知的障害者に雪かきボランティア

雪の日には「出番だ」と意気込むのは、知的障害者更生施設「太田の園」の入所利用者たち。いつもは施設内で作業を行う彼らもこの日だけは別だ。施設周辺の雪かきを終えると、軽トラックやワゴン車に飛び乗り、職員といっしょに高齢者宅へと向かう。

北国では雪かきが悩みの種だが、独り暮らし高齢者にとってはなおさら。あらかじめ登録しておくだけで、雪かきやつてくれるスノーバスターズの存在はどんなに心強いことか。登録世帯はまだ10軒ほどだが、市の社会福祉協議会と連携して、PRしていくという。

スノーバスターズとは、雪深い沢内村で自然発生的に誕生したボランティア活動。村の青年有志が行っていた除雪ボランティアを組織化して、8年前にスノーバスターズが結成された。今では県内の市町村の

みならず、秋田県や新潟県へも活動の輪を広げている。活動内容は雪かきをはじめとして、声かけパトロールなど。

「スノーバスターズを心待ちにしている高齢者も」と、自ら雪かきボランティアに精を出す指導員の難波氏は力を込める。結果として、外界に接することの少ない知的障害者と独り暮らし高齢者の交流の機会にもなっているようだ。

### 「都市マス」づくり

#### 中学生の意見を

盛岡市では都市マス(都市計画マスタープラン)を作成中だ。都市マスとは将来の都市像を明記したもので、まちの方向性を決める重要なプラン。

「都市計画法の改正により、住民参加が義務づけられたこともあり、そこに暮らす広範な市民の意見を都市マス作成に生かしていこうという自治体がほとんどだ。盛岡市でも他都市と同様、市民意識

調査(アンケート)やセミナー、フォーラムを実施し、ホームページ上で意見を募集。

イラストや写真、図表を多用した都市マス策定情報誌「Anonassu(あのなっす)」の発行も、市民に参加を促す手立ての一つ。「あのなっす」とは、盛岡地方の方言で「あのね」の意味。岩手大学教育学部附属中学校では、これまでも社会科の授業で、「盛岡を知ろう」をテーマとして地理の授業を行ってきたが、都市マスタープランづくりも授業に取り入れている。

生徒たちは4〜6人で1グループをつくり、理想の都市像を語り合い、グループのめざすものをまとめた。そこで出された都市像はゴミのないまち、自然を生かし

たまち、高齢社会に対応できるまちなど実にさまざま。

自分たちが考える理想の都市像をもとに、自らが行政、企業、商店街、高齢者ケア施設などの取材先を3件程度選定、電話でアポイントメントを取った。取材先では、市民として丁寧に対応してくれたという。

生徒たちは取材の成果を踏まえて、「総合的に見た理想の盛岡とは」「盛岡のPRを含めたキャッチフレーズ」「究極の具休策」などの項目からなるワークシートに自分たちの考えを記入して、マスタープランに応募。市の都市計画課では、大切な資料として保管している。彼らの意見が、

### 新たな都市軸を形成する

そのフォームから、「でんでんむし」と呼ば

実際のプランにどの程度生かされるのかは未知数だが、自分たちのまちを見直し、理想の姿を思い描くこと自体に大きな意味がある。

「フィールドワークを通じて、生徒たちの間に地域社会の一員としての意識が芽生えた」と担当教諭の駿河孝史氏は強調する。

中学生の都市マスづくりへの参加は、障害のある人や高齢者の参加と同様に、結果として、ユニバーサルデザインのまちづくりに貢献していくことだろう。



スノーバスターズは雪深い沢内村から始まった



「でんでんむし」の愛称で市民に親しまれる市内循環バス

### 盛岡南地区開発



盛岡駅と「マリオス」はペDESTリアンデッキで結ばれており、駅構内の整備が進めば、車イス利用者でも、列車から降りて「マリオス」まで、介助なしで行くことができる。盛岡市では、ユニバーサルデザインの推進を目的として、次長級の会議もたれており、進行中の土地区画整理事業についても、可能なかぎりユニバーサルデザインを生かしていく構えだ。

駅西口地区から、橋を渡るともう南地区。約44.5haの広大な敷地に、コンベンション拠点、住居機能、都市型産業拠点、生活文化レクリエーション機能を併せもつ新都心が建設される。



# 水沢市

## 「どごえんちや」の精神で ホスピタリティ・シティをめざす

### 商店街活性化に高校生の知恵を

駅前商店街に「どごえんちやハウス」の看板を掲げた風変わりな店舗がある。「どごえんちや」とは水沢地方の方言で「いらしてください」の意味。正面のウィンドーには「やさしい環境」「地球を守る」の文字が躍る。

この店舗を切り盛りするのは、県立水沢商業高校商業研究部の生徒たちだ。商工会議所が空き店舗を借り受け、未来の水沢商人に店舗の運営を委ねている。授業の関係で、オープンは土・日曜にかぎられているが、地元の農産物を中心とする商品の売り上げは、1日平均10万円を超える。

この生徒たちは昨年、駅前商店街をタウンウォッチング。その成果は商工会議所・TMO推進室で発行する『歩いて水沢』で、街角イラストマップの中にまとめられている。

水沢市は1999年に策定した「水沢市

やさしいまちづくり総合計画」の中で、「地域特性にあつたユニバーサルデザインの形成」を明記。中心商店街については、「車に頼らないで利用できる商店街の環境を整備することが重要」としている。

市では総合計画の一環として、官公庁、文化・スポーツ施設、保健・福祉施設、郵便局・金融機関、医療施設、飲食・宿泊施設、販売施設、運輸・通信施設の内容を絵文字で示した「ふれあいガイドマップ」を作成。これがあれば、車イス対応トイレやエレベーターのあるなしが一目瞭然だ。ユニバーサルデザインのまちづくりは、このような現状の把握から始まる。

### 歴史的なまちなみを アクセシブルに

水沢市は伊達藩の城下町として栄えた面影を色濃く残している。中心商店街から武家屋敷が建ち並ぶ大畑地区へは徒歩5分。ここは武家屋敷の門のデザインを眺め

て歩くだけでも楽しい地区だ。

歴史的まちなみを再生させるためには2007年までに、道路や公園・広場の整備を行う予定だ。蔵を改造したカフェバーを横目に眺めながら歩を進めると高野長英の旧宅が現れるというように、今でも旅人にとっては歴史の残り香を感じられるまちなみだが、狭隘な道路がかなりあり、歩きづらいのも事実。道路が整備され、途中で休憩できる居心地のよいスペースができれば、訪れる人も増えるだろう。

水沢からは幕末の先駆者高野長英、東京市長や内相を務めた後藤新平、内相として二・二六事件で凶弾に倒れた斎藤實など、歴史上の人物が多数輩出されている。市内にはこれら3氏の記念館があり、総合計画の理念にのっとり、市庁舎等と併せて、玄関の自動ドアやスロープの整備が進められている。また市はJR東日本に働きかけ、水沢駅にエスカレーターを新設、多目的トイレも設けられた。



道路整備と並行して街区公園の整備も行われた



武家屋敷が続く歴史的街並み「大畑地区」



# 江刺市

## 田園地帯に突如出現する

### 「黒壁」のまち

#### 小規模作業所では畑仕事も

江刺市は高度成長期に若年層が流出して、人口が1万人も減少した。この時期の急激な人口減少が、人口構成をゆがめて、少子化、高齢化に拍車をかける要因となっている。高齢化率は約28%（2001

年4月現在）。

ヒロノ福祉パークは、市街地から車で5分の距離にあり、周囲には田園が広がっている。同市出身者で東京在住の広野キエ氏が「故郷の高齢者の福祉に役立ててほしい」と、1億1000万円を寄付し、これを基金として設立された。同パークの



今年完成した市庁舎は各所にユニバーサルデザインが生かされている



黒壁のまちに生まれ変わった中心市街地

名称である「ヒロノ」は、寄付者の名前を冠して付けられている。同パークは総合コミュニティセンターを中心として、高齢者生活福祉センター、特別養護老人ホーム、老人保健施設、痴呆性高齢者のグループホームなどが建ち並

ぶ福祉の拠点。総合コミュニティセンターはコミュニティゾーンとリハビリゾーンの2つで構成される。コミュニティゾーンは市民の趣味やボランティア活動の場であり、リハビリゾーンは障害のある人の活動の場だ。リハビリゾーンには身体障害者デイサービスセンター、知的障害者通所授産施設、精神障害者小規模作業所が置かれている。障害の部位や状況が異なる人々が、日常的に顔を合わせることができるとこのような施設はめずらしい。夏祭りなどの催事をいっしょに行うことで、相互理解を得やすくする利点がある。

ここでは、作業の場が施設内とは限らない。知的障害者作業所では、隣接地の畑を借り受けて、野菜を栽培しており、収穫物はバザーなどで販売されている。

#### 中心市街地へ観光客を誘導

市の中心に位置する「岩谷堂」はその昔、北上川の水運集積地として長く栄え、そ

の名残である土蔵が市街に1000棟あまり現存している。

ここでも他の地方都市と同様、郊外への大型店舗の進出による客離れで、空き店舗が目立ち始め、歴史的な財産である土蔵が壊されようとしていた。低迷状態を打破しようと、若手経営者らが立ち上がり、まちづくり会社「株式会社黒船」が創設された。同社は1999年、滋賀県長浜市の（株）黒壁の協力を得てガラス製品を製造販売する「黒壁ガラス館」をオープン。この施設をまちづくりの核として位置づけ、観光客の回遊を図っている。黒船スクエアの一角には「オルゴール岩谷堂」も開店した。

同年、市は「江刺タウンマネジメント（TMO）基本構想」を策定。同構想で中核施設として位置づけられた江刺ターミナルプラザは、市内に点在する観光資源を結ぶ周遊ルートの起点、また整備が進む中町商店街の動線としての機能をも併せもつ。えさし夢プラザは、観光情報の提供と物産品の展示・販売を行う。

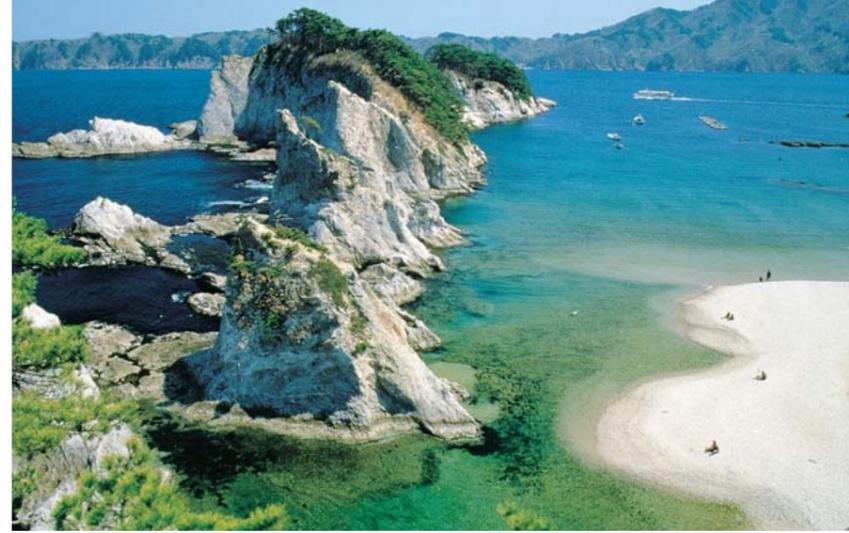
市内には、アクセシブル江刺などの市民団体があり、公共空間や建物の整備には、当然のことながら彼らの意見も反映される。真新しい庁舎も、結果としてユニバーサルデザインが各所に生かされている。



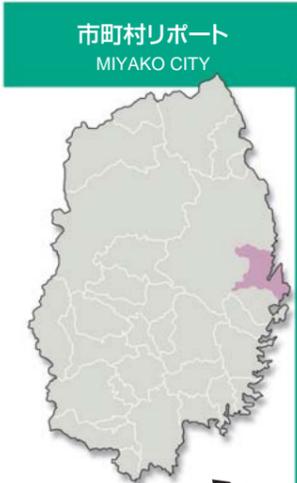
レストハウスの出入り口はUDで改修される予定(浄土ヶ浜)



車イス対応トイレ。建物の両端にスロープを設置(浄土ヶ浜)



三陸海岸国立公園の景勝地、浄土ヶ浜のユニバーサルデザイン化が模索されている



市町村レポート  
MIYAKO CITY

# 宮古市

## 観光ツーリズムに力を注ぐ もてなし交流観光都市

### 観光基盤のUD化に力を注ぐ

盛岡市から車で2時間30分。宮古市は三陸海岸沿いの漁業と観光のまち。浄土ヶ浜などの風光明媚な景勝地を抱える三陸海岸国立公園の観光の拠点である。

宮古市は昨年、「もてなし交流観光都市」を宣言した。この宣言を達成するために、障害のある人や高齢者、外国人など、すべての人にやさしく、そして交流可能な観光地づくりを実践する。市民の間にホスピタリティの心を醸成するとともに、観光関連基盤をユニバーサルデザイン

の概念に基づいて整備し、観光客の誘致を図る。同市の観光はこれまで浄土ヶ浜を中心とした「自然景観・通過型」のものだったが、「体験・ふれあい型」の観光にも注力するために、広域総合交流促進施設とタラソテラピー施設が整備される。

### 広域総合交流促進施設では、水産物や特産品を展示・販売。地元の食材を生かした料理、手作り体験・学習メニュー、観光情報を提供し、市民と観光客の交流を図る場とする。

タラソテラピーとは海水、潮風、海藻、地域の気候・食材などを活用する海洋療法のこと。この療法は生活習慣病やストレスなどの現代病、健康回復、美容やリハビリなどに効果を発揮する。全国には、千葉県勝浦市、富山県城端町、青森県市浦村に同様の施設がある。今年度中に設計し、2002年度に着工、2004年の開業をめざす。建設費は合わせて約22億円。完成後の運営は

第3セクターを予定。交流促進施設とタラソテラピー施設は、相互の機能を補うために、1つの建物として整備され、ユニバーサルデザインも生かされる見込みだ。

第3者機関として、「介護保険サービス向上委員会」を設立し、事業者全体のレベルアップもめざしています。

### 宮古もてなしプラン

おおきに・プロジェクト	おでんせ・プロジェクト
①もてなし読本の作成	①観光情報の提供
②もてなし研修会の開催	基本情報
もてなし基本研修	観光目的別のモデルコース
身障者、高齢者への対応研修	年齢別のモデルコース
外国人観光客への対応研修	飲食店、土産品店等の情報
心肺蘇生法などの救命研修	交通情報
その他	医療機関に関する情報
③市民総ガイド化の推進	その他
④人材の育成及び確保	身障者や高齢者への情報
観光ガイドの育成及び確保	車イス用トイレの情報
体験型観光指導者の発掘、確保	車イスが走行可能なエリアの情報
外国語通訳者の確保	車イスで宿泊可能な施設情報
手話通訳者の確保	高齢者向けの施設情報
ボランティア助員の確保	その他
その他	外国人への情報
	トラブルの際の連絡先情報
	国際交流協会に関する情報
	金融機関に関する情報
	その他
	②施設整備の促進
	公的施設のバリアフリー化促進
	民間施設のバリアフリー化に関する指導助言
	その他

\*「おおきに」は、「ありがとう」を意味する宮古弁。「おでんせ」は、「おいでください」という言葉に相当する宮古弁

## 市民とのキャッチボールが不可欠

### 首長インタビュー

熊坂義裕 宮古市長

くまさか よしひろ ● 1952年、福島市生まれ。1978年、弘前大学医学部卒業。同大学医学部教官を経て、1985年、岩手県立宮古病院内科科長。1987年、宮古市内に医院開業。1997年、宮古市長就任、現在2期目



### 住民参加と情報公開に重点を置く

青年会議所活動などを通じて、純粋にまちをよくしようと思ったのが、開業医から市長に立候補した動機です。医者としてのヒューマンイズムですかね。最初の選挙は8年前でしたが、僅差で落選。4年前に初当選して、2期目を迎えたばかりです。

市長というのは選挙で4年ごとに評価されますが、選挙を意識すると、すべての判断が狂ってきます。例えば、2つの地域が建設を望んでいる公共施設を造る場合、「それぞれに前向きに検討しておきましょう」と言えば、丸く収まるのですが、それではいつまでたっても必要な建物はできない。行政の責任を逃れていることになります。どちらにもいい顔はできません。そんなとき、重要になるのが市長のリーダーシップです。

私が特に重点を置いているのは住民参加と情報開示。景気対策のための事業だからとか、補助率が良いからといって、住民の意見も聞かないで、行政の独断で造るから、誰も望んでいないものができる。市民の意見を聞いて決断したり、自分の決断したことに対して市民の意見を聞く。そのキャッチボールがうまくいくことが、暮らしやすいまちづくりの条件です。

市民とキャッチボールするためには、情報開示が重要になってきます。宮古市が1999年に制定した「情報公開条例」は、北海道東北オンブズマンネットワークから、公開度がもっとも高いと評価されました。

現在市内にはNPOが1つしかありませんが、民間でできることは民間に任せていく考えです。最終的には政策評価を行うNPOの出

現を望んでいます。そうすれば、市長のわがままも許されない。AランクとDランクのものがあれば、Aランクのものをやるしかないからです。

### 市町村の役割が重要に

地方分権の流れからいうと、住民と直に接する市町村の役割が今後ますます重要になるでしょう。市町村再編が進み、30万人前後の基礎自治体がたくさんできれば、国と地方との関係も変わります。

国は相当な権限や財源を自治体に委譲し、外交や防衛、司法に専念する。県は過渡的に広域連携の役割を担うようになり、やがては道州制へというシナリオです。

宮古市は地形的な制約があるので、将来人口は10万人ぐらいかもしれませんが、今よりもはるかに独自の施策を行えるようになります。その試金石となったのが介護保険制度。この制度は、市区町村が独自に保険料を設定できますし、計画作成に住民参加が義務づけられています。

宮古市では介護サービスの提供は100%民間。当市の社会福祉協議会は事業型への脱皮がうまくいった代表例として全国的に有名です。1992年に4人だった職員が今では160人。市は人件費の補助を出していませんが、それでも黒字です。1人で5、6軒回る地域ヘルパー制を採用するなど、効率的に運営されているからでしょう。

第3者機関として、「介護保険サービス向上委員会」を設立し、事業者全体のレベルアップもめざしています。

### ユニバーサルデザインを施策化する

宮古市役所の総合窓口は、金融機関や医療施設のような印象を受けるはず。総合窓口を訪れるだけで、住民票などの各種証明書の発行や国民健康保険や年金の相談など、ほとんどの用件を済ませることができます。これにより、役所の中をたらい回しにされることはなくなりました。

私はこのような取り組み自体が、ユニバーサルデザインだと思っています。建物の構造とかはユニバーサルデザインのほんの一部で、多文化共生や男女共同参画なども、ユニバーサルデザインに入ってくる。これからの自治体行政には、多かれ少なかれ、ユニバーサルデザインの考え方を取り入れていかなければならないでしょう。